
花火線香 ～ひと夏の思い出～

廣瀬 るな

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

花火線香　くひと夏の想い出

【Nコード】

N7170N

【作者名】

廣瀬　るな

【あらすじ】

『叶わなかった初戀ほど、想い引きずるものはない』
誰かが書き記したその言葉を、二人はずっと胸に抱いていた。そして少年は、憎まれても良いから覚えていて欲しいと願い、少女は忘れたいと望んでいた。

第一話 牡丹：着火 ぷっくりと膨らむ赤い花 (前書き)

恋愛遊牧民様 <http://g-nomad.com/>

の短編企画参加作品です。

お題は ひと夏の想い出 お楽しみくださいね

第一話 牡丹：着火 ぷっくりと膨らむ赤い花

予兆が有ったのは、梅雨に入りはじめの頃だった。いつもは明るく朗らかな夏子の母が、滅多にかかってくる事のない固定電話を受けた瞬間、声のトーンを変えたのだ。

「ご無沙汰しております」

それはとても慇懃で冷やかな音だった。普段の母らしくもないと感じながら、彼女はアイロンがけの手を休め、46歳という年齢よりも若々しい、ほっそりとした背中を見つめた。

夏子の両親が離婚したのは、丁度彼女が中学二年の夏の終わり。蝉がジリジリと大地を揺さぶり、足下から陽炎が沸き上がる灼熱の午後だった。

「皆様、お元気で」

もう顔も忘れた父親とその両親に向かって母が深々と頭を下げ、彼女はその様子を一步下がった場所から眺めていた。小笠原家の大きな門の内側に立つ三人は、返礼のお辞儀をすることもなくくるりときびすを返し、クーラーの効いた家の中へと帰ってゆき。

「じゃあ、行きましょう」

母は済まなそうに頭を垂れ、娘の手を引いたのだ。もう十年以上前の話だ。その瞬間の母親の異様なほど冷たい手の感触を夏子は今でもはつきりと覚えていた。

あれ以来、雅子は女手一つで夏子を育てたと言っても過言ではない。だからといって彼女は愚痴をこぼすでもなく笑顔を浮かべたまま必死に働き、それ故に夏子は母親の代わりになって、二人を捨てて他の女へと走った父親を、男の子を望み嬉々として二人を追い出した祖父母を、そして運良く父親の子供、しかも男の子を孕んだその女を、憎んだ。

だから今更、その父親が若くして末期がんにかかり余命数週間と告げられ

『娘に会いたがっているらしい』

と言われても、

「冗談じゃない」

夏子は首を振り、同時に湧き上がる

“罰^{ひい}が当たったんだ”

の言葉を喉元で堪えた。母親は受話器の送話口を手のひらで抑えながら困ったように言葉を探し、口を開きかけた。当の本人が、絶対会いたくないと思っているものを無理に行かせる事はできないから「仕事が忙しいから、そんな簡単に行く事なんかできないって伝えて」

夏子は困っている母に投げ捨てるように言った。それは間違いじゃない。この就職難の時代、身元の保証の不確かな母子家庭の子供がきちんとした仕事にありつけ暮らしていけるのは、運が良いとしか言いようがなかった。ムリに休暇をとるなんてできないのだ。

「だってそうでしょう、母さん。私達はあの人達と違って、働かないと食べていけないんだもの。“娘は普通の勤め人だから、休暇の申請には時間がかかります”って断って」

死んだからといって、あの父親の財産なんか要らないと思った。米すら買えず、小麦粉に刻んだキャベツと卵を加え焼いただけの食事を繰り返す日々はもう過去のもの。雅子と夏子の母子は自立し、プライドを支えに生きてきたのだから。そんな娘の気持ちを探し、母親はやりわりと、それでいてきっぱりとその話を断った。

受話器を置いた母に

「あんな男の事なんか気にしないのよ」

夏子は努めて明るく聞こえる声で話しかける。

「もう他人なんだから。それよりこの週末、広田さんと温泉に行くんでしょ？」

広田というのは母親の年下の恋人だ。彼はどちらかと言うと不器用なタイプの男で、夏子に対してもいつも微妙な敬語で話しかけてくる憎めない男だった。

「しつかり肌のお手入れして、気分はつらつでで出かけなくっちゃね」

父親につけられた心の傷が拭いきれず、いまだに男性不信を引きずる夏子と違い、雅子は少しづつ幸せをつかもうとしている。

「だから頑張つて！」

微笑む返す母に夏子は心からのエールを送り、遺伝子上の父親の事はすっかり忘れ去っていた。

そのはずが、明日にはお盆休みに入ると喜んでいたその夕方に訃報が届いた。

「たった今、亡くなったんですって」

これと言って予定もなく、親子でお盆の人気のない東京の街で遊ぶうかと意気込んでいた矢先の事だった。

「昔から“村八分”って、言うでしょう？」

娘に向き直った雅子の口調には、密かな決意が有った。

「火事と葬式だけは別だって」

引き結んだ口元。

「まさか、母さんはあの男の葬式に行くって言うの？」

冗談じゃない。夏子は思った。臍に覚えている高くて威圧的な堀、迷子になりそうな長い廊下、湿った土間の臭い。広くて冷たい畳敷きの応接間。雅子や夏子に向かって

「これだから女は」

と罵声を浴びせる祖父と、それを見て見ぬ振りをする父親。頷く祖母の影。

「あんな家になんか、帰りたくなかない」

言葉に出し、その瞬間自分がいかにあの家に縛られているかに気がつく。そう、夏子は確かに“帰る”そう言ったのだ。結局彼女の中で、あの忌まわしい家は自分が過ごした家に変わりはないのだ。うつむく娘に向かって、母は噛みしめるように語った。

「だから、最後のお別れをしに行きましょう」と。

帰省ラッシュで込み合う電車に揺られながら、夏子は考えた。確かに、あの家には嫌な思い出が沢山あった。しかし一歩外に出て学校に行けば、楽しい思い出が山のようにちりばめられていた。両親が離婚し現実を知らされるその瞬間まで、確かに夏子の青春は生きていたのだ。だが、それがいけない。頭に浮かぶ友達的笑顔と笑い声。ふざけ合い、名前を呼び合いながら他愛もない事に喜ぶごく普通の日々。数々のシーンが胸の中をよぎり、あの頃の自分がまるで完璧な幸せに包まれていたかのように感じてしまうのだ。そして甦る、ひよろりとした少年のシルエツト。小さく肩をすくめながら、そつと手を振る見慣れた仕草。眩しげな瞳と、じわりと浮かぶ、はにかんだ様な表情。あの彼に再び会う事になる。夏子はそんな、確信にも満ちた予感を胸に抱いていた。

ようやくと辿り着いた郷里の駅は、沢山の紙袋を抱えた人達で溢れかえっていた。人が多くいる所為なのか猛暑の所為なのか分からないむっとする空気に包まれ、二人は思わず足を止めてしまい、「嫌なところ、来ちゃったね」

呟く夏子に

「そこを乗り越えるって事が、大人になるって事なのかもよ」

母親は案外明るい口調でそう言った。そのけなげさに

「うん、そうだね」

唇だけの笑顔を見せながら、夏子は頷いた。

駅に降り立った彼女が着ていたのは、昨日の夜にユニケロに駆け込み買ってきた“とりあえず黒”のワンピースとレギンス。電車の中で着替えた。今の彼女の生活では、電車代を出すのが精一杯。こんな日だというのに、きちんとしたフォーマルスーツさえ用意する事ができないのだ。その全て元凶とも言える父親の葬儀に出るなんて。爽快感に辿り着くにはほど遠い、噛み砕く事のできない気持ちが続いた。

父の浮気相手は、繁華街の外れにある“クラブ”と言われる類いのお店で雇われママをしていた。と言っても本当なのかどうかは分

からない。それはまだ中学生の夏子に、あまり耳に入れないように気をつけながら母方の親族が囁いていた言葉だった。

『随分なべっぴんさんで、夏ちゃんと同じ歳の子供がいるとは到底思えない』

『それにしても男に困った事のないような女だから、腹の子が、本当に本家の息子の子供かどうか、怪しいもんだ』

ひそひそと伝わる響きと、聞かれている事を意識しているこっそりと盗み見る目つき。それは日頃夏子に良くしてくれていると感じていた親族からあてがわれた、見て見ぬ振りを学ぶと言う大人独特の通過儀礼の様だった。

「こっちょ」

そんな奇妙な思い出に浸っていた夏子に母親が声をかけ、新しくなつて様変わりした駅の案内を指差した。

葬儀が始まるのは十一時からだと連絡をくれたのは、祖母の妹を名のる女性からだった。遠方から行くのでギリギリに着く事になると言う二人に、先方は車を向かわせると上品な猫なで声で言った。

タクシーで行くからと渋る夏子に、相手はどうしてもと食い下がり、その上最後は

「ごめんなさいね、これから打ち合わせが有るものですから、ごめんくださいまし」

と電話は切られてしまっていた。耳元で繰り返される通話終了のトーンは、是が非でも葬式に来说いと言つ無言のプレッシャー。だからこそ彼女は

「行つてやろうじゃないの」

と腹をくくつた。かといつておとなしく迎えの車に乗つてやる事はないのだ。きよろきよろと周りを見渡して人を捜す仕草さえしてやるものかと思ひ、足早に改札を抜け、タクシー待ちの列に並ぼうとした。とその時、二つある出口の片端で、見るからに品の良いブラックスーツの男が動いた。歳の頃は夏子と同じ位だろうか。社会人というには髪は少し長めで、この季節だというのにパリッと糊の利

いた長袖のワイシャツを着ていた。その彼は夏子が気づくよりも早く彼女の目の前に姿を現し、戸惑う女二人組の前でほんの少し背筋を伸ばした後、夏子の瞳をじっと見つめた。

「あっ！」

“もしかして……”

彼女の顔に驚きが浮かぶ。彼はそれを振り払うように

「お待ちしていました」

躊躇わずにしっかりと頭を下げた。

「野々村と申します。小笠原の家からたまわって、道下雅子さんと夏子さんのお迎えに参りました」

声は深くて鮮明。あげたその顔は、ハンサムと言えばハンサムで、韓流が好きな雅子にとっては120点の顔立ちだった。しかし男はにこりともせず、イケ面などという軽い言葉はけっして寄せ付けることのない雰囲気醸し出していた。

続く

第一話 牡丹：着火 ぷっくりと膨らむ赤い花 （後書き）

* タイトル“花火線香” は “線香花火” の間違いでは？
と思われた方もいらっしゃると思います。いえいえ、あえて、“花
火線香” です。

語感、とでも言いましょうか。このお話では、花火という言葉が持
つ艶やかさより、線香という言葉が持つ重たさが漂っていると感じ
ています。

とはいえ、ラストに後味の悪さを残す予定はないので その点
に関しては安心してお進みくださいね？

第二話 松葉：激光 炸裂する火花

東京ナンバーの右ハンドルのベンツに揺られながら式場までの道に行く。

「葬儀が始まる時間ぎりぎりに着く事になると思います」

彼はそう言ったきり何もしゃべらず、まるで慣れた道でもあるかのようにスムーズに運転を進めた。

流れて行く景色。時々

「懐かしいわ」

そして

「変わったわね」

雅子が窓越しに呟く。なにしろここに帰ってくるのは離婚して以来初めての事だった。そんな母の気持ちを探し、夏子は何も言えないままバックミラー越しに男の顔を盗み見た。記憶の中にいる野々村清彦^{よひこ}は果たしてこんな顔だったのか、と。そして予期していた事実をこつとも早く突きつけられたはずなのに、彼に抱くと想像していた“怒り”や“恨み”の感情が湧き上がらない事に驚き、戸惑った。その密やかな、彼にとっては覚悟していた猜疑心の眼差しを、清彦は鏡の中で受け止めた。すると夏子はハッと目を反らし、自分の殻に閉じこもるかのように体を堅くした。

仕方のない事だ、彼はそう思いながら用意していた言葉をきわめて冷静に聞こえるように吐き出した。

「私の母は、亡くなった小笠原隆敏^{たかし}さんの後妻に入った者です」

三人の頭の中に“妻を追い出して”の言葉が走り、重い沈黙が訪れた。誰もが、誰かに次の言葉を担って欲しいと思いつながら、言うべき言葉を探し、唇を結んだ。そしてしばらく走り清彦は重い口を開いた。

「噂では聞いていると思いますが、あの時の子は死産でした」と。

「えっ？」

夏子は反射的に母親の顔を見た。“あの時の子”が十年前の赤ちゃんの話だというのはすぐに分かった。なにしろ、二人が追い出される原因となったのがその子で、夏子にとっては決して罪のない子供を憎んではいけない、そう知りながらも恨みを抱いてしまう悲しい存在で。そのくせ実の弟がいるのだという淡い期待を持たせてくれる数少ない肉親だったのだ。一方の雅子は堅い表情のまま前方を見つめていた。

「母さん……！」

この時初めて、夏子は母がその事実を知っていて彼女には黙っていたという事を知った。母娘の間に緊張感が走り、夏子の頭は混乱した。子供が産まれなかったからって、また元の家庭に戻れるとは思わない。でも当事者として、夏子にだって知る権利は有ったはずなのだから。その張りつめた空気を感じながら、清彦は自分が打ち明ければいけない話をあえて続ける事にした。

「あれから母は何回か妊娠した様ですがいずれも流産で、結局小笠原の子供を産む事はできませんでした。ですから、夏子さんが小笠原のたった一人の跡継ぎになります」

四十歳を過ぎてなお、産婦人科にかかり子供を授かるうとする母親の姿を見てきた息子だった。投げやりな態度を見せる義理の父親と共に車に乗せ、有名な不妊外来へと連れて行った事もある。三人共もう明美に子供が授かる事はないと知りながら、あえて口に出さず、『今度こそ成功するに違いないわ。だって、そんな予感がするものはしゃぐ女に男達は無言で笑いかけ、心にシャッターを下ろしていた。』

葬儀場にはすでに沢山の人が集まっていた。清彦の案内で二人が列をかき分け進んで行くと、ひときわ響く声が夏子の名を呼んだ。祖父だった。彼は抹香（不祝儀で使うお香）の立ちこめる場にそぐわない満面の笑顔で彼女を傍に引き寄せると、

「まあ、まあ、まあ。大きくなって。お前は父親にそっくりで美人

だな」

と言った。何が“まあ、まあ”で、何が“父親にそっくりで美人”なんだよ、そんな怒りが夏子の中で首をもたげる。彼女がこの場に來たのは、あくまで決別を意味しての事だから。だからこそあえて「お久しぶりです、おじい様」

お前は他人だ、の意を込めて見せかけだけの作り笑いを浮かべる。続いて夏子の後ろで雅子が丁寧に頭を下げた。しかし長い間地元の大將として君臨している老人には、自分が蔑^{さげす}まれていいるという事実に考えが及ばない。

「お前の席はこつちだ」

強い腕が夏子をつかむ。そして

「雅子さん、あなたは夏子の隣で」

二人はあつという間に周りの人を押し退け最前列まで連れて行かれ、喪主となる年寄りの横で

「これで式が始められる」

の言葉を聞いた。

「えっ、でも、ちょっと」

夏子は激しく動揺した。まさか親族席で参列する事になるとは思いもよらなかつたのだ。その上、彼女にあてがわれた場所は祖父の隣、祖母すらも雅子の末席で。何よりも、青白い肌に炎の様な目をした中年の女が二人を食い入るように見つめているのだ。その瞳は見開かれ、首筋に血管が浮かんだ。引き倒された椅子の音が響き、

「ふざけないでよ！」

人々のざわめきは彼女の一言でかき消され、場内は水を打ったように静まり返った。

「何で今更この女が出てくるのよ、いい加減にして！ 隆敏の妻は私なの！ それなのになんで私が家を追い出された女に席を譲らないといけないの？」

上座につれてこられた瞬間、この展開が起こる危険を察した夏子だったが、いざとなるとそれはまるでテレビドラマの中での出来事の

様だった。

「確かに私は小笠原の子供を産まなかったかもしれないけど、でも、隆敏の妻であつた事には変わりはないんだからね！」

髪振り乱し、詰め寄る女。この時夏子は、綺麗な人は狂気の人になつても綺麗なんだ、と、どこか上の空でその情景を眺め、傍観者になろうとしていた。しかし女の手が母親に伸びようとした瞬間、あの夏の日の冷たい手の感触が甦り、シャボン玉が弾ける様に目が覚めた。私が守らないといけない。夏子は怯える母の前に素早く立ち上がり、鋭い爪を顔に浴びながら馬鹿力を振り回す女を押し退けた。痛みを感じる事はない。誰もが狼狽え木偶の坊のように突つ立つてる中で、自分だけが母親を守れる存在だと感じたのだ。

「母さん、止めてくれ！」

がたがたと椅子が引き倒され、むしり取つた夏子の髪を指に絡ませながら、自分を押さえつける男に向かつて女が叫んだ

「こいつ等はね、私をあの家から追い出す魂胆なんだよ！ 血も涙もない人間なんだ！ 畜生なんだ！！」

の甲高い声は、目の前にいる夏子を鋭く貫いた。彼女の体の中で、本来ならば亡くなつた父に向かうはずの怒りや自分達を追い出した祖父母への憤り、初めて知つた母の隠し事に対する行き場のなかった感情が膨れ上がる。

「このつ……！」

拳を固めたその時、間髪を入れず

「母さん、止めてくれ！」

明美をつかんでいる息子の悲壮な声が葬儀場に響いた。

「母さんがそれを言っちゃいけないんだ！」

この場にいる誰もが知っている事だった。妻から夫を奪い、子供を捨てるように仕向けた彼女こそが家を追い出されるべきなのだと。そして

『天罰』

の一言を、いつかどこかで彼女に言つてやりたいと思っている観衆

がそれぞれの肩越しに未亡人の動向を見つめていた。

いつそのまま絞め殺せたら、自分も母親も、そして全ての人間が幸せになれるかもしれない、そんな危うい妄想を胸に抱きながら彼は母親を外へと連れ出す。

「落ち着こう、な、母さん」

彼は歯を食いしばり、力の抜けかかった女の体を自分の車の中に押し込んだ。車中には夏子なつこのものとされるほのかに甘酸っぱい香りが漂っていて、二人が纏まとっていた線香の香と混じり合い

「俺だって、泣きたいよ」

彼さえも肩を落とし、親子は互いに抱き合い身を寄せた。

第三話 柳：火滴 消え細る赤く長い糸

男が母親を尋ねてくるようになったのは、確か小学校五年生の頃だったと彼は記憶している。反抗期が始まる直前で、少年は母親に対して甘えと反発の波を繰り返すようになっていた。元々が母子家庭、しかも母親は水商売で、安定した生活ではなかった。しかしそこに他の男が加わる事で、三人の関係は不思議な均衡を保っていた。隆敏おじさんは今まで母親のところに来たどの男とも違って、清彦に向かって普通に声をかけてくれ、母親の見ていない所で腹を殴ったり威しをかけてきたり、金を渡し

『お小遣いをあげるから、二三時間外で遊んでいなさい』

と命じる事もなかった。指に指輪もなく、だから少年は素直に

「おじさんが父さんだったら良いのにな」

そう口にした。彼はふふふつと笑い、

「ああ、そうだな。俺も君みたいな男の子の父親になるのが夢だった」

と少年の頭を撫でた。それはとても穏やかな日々の様だった。その男が、自分が密に想いを抱いている夏子の父親だと知った時、彼は愕然とした。小笠原という名前は心のどこかで引っかかってはいたものの、まさかここでつながりがあるとはい思ってもよらなかったのだ。セーラー服のリボンを翻しながら、六月の晴れ間をぬって校庭で練習する陸上部の集団に手を振る夏子。

「これから父さんの車で歯医者に行かなきゃいけないから、先帰るね。じゃ、みんな、頑張つてね」

こぼれんばかりの笑顔に、

「おゝ、ナツツ。歯医者で泣くなよー！」

と返事をする同級生。彼は夏子自分だけに手を振ってくれているのではないのだと自覚しながら、自分の気持ちが下手に伝わってしまう事がないように肩をすくめ、小さな笑顔で応えた。そして彼女

が歩き出し背中を向けた瞬間、やっと

「また明日」

そう語りかけた。練習に戻った仲間達を尻目に、彼女が校門を抜け迎いの車に乗り込む姿を追い、もしかしたら彼女も自分の事を気にしてくれているかもしれない、などと一瞬の甘い余韻に浸りながら、そのはずが、

「嘘だろう？」

彼は体を凍らせた。運転しているのは、そう、母親の恋人でもうすぐ産まれるはずの子供の父親だ。彼は助手席に座った夏子の頭をポンポンと撫で、彼女のためにシートベルトをかけてあげようと身を乗り出していた。清彦はきびすを返し、校庭の裏にある雑木林に駆け込み、気がついた時には胃の中のもの全てを吐き出していた。

『赤ちゃんができたのよ』

満面の笑みを浮かべた母親に、照れ笑いを浮かべる男。窓の外では八重桜が舞っていた。

『おめでとう』

心からそう思い、祝福をする自分。……何もかもが欺瞞ぎまんだった。彼の家族が、彼女の家庭を壊そうとしていた。

「止めてくれ」

その夜、彼は母親に懇願していた。なぜか母親はあの男が妻帯者だと知っていてつき合っていたという確信は有ったのだ。

「人のもの、盗っちゃ駄目だよ」

彼だって、父親が欲しかった。でも

「こんなの、上手くいかない。自分だけ幸せになろうとしちゃ、いけないんだよ」

他人を踏みにじってまでもつかみたい幸せじゃない。しかし勝者になる事を望んでいた明美は、痛む良心を抱える息子を鼻で笑った。

「お前は偉そうにそんな事言うけどね、じゃあお腹の子供に父親は要らないって言うの？ この子には幸せになる権利がないって、そう言いたいのか？ たいした稼ぎはないくせに、言う事だけはご立派

な所なんか、お前は実の父親そっくりだね。口先ばかりで偉そうに。お前が正しいって思っている事は、上っ面だけの綺麗事だから。あたし達が生きていくためにはね、必要なものってのが有るの」それが“愛情”ではなかった事は確かだった。そして彼には、母親を思いとどまらせるほどの力はなかった。

その晩、葬儀場から連れ出された明美が他の人達の前に再び姿を現す事はなかった。しかし、会場をかえての振る舞い（通夜や告別式に参列してくれた人と会食をし、故人を偲ぶこと）には清彦が末席で座し、喪主が頭を下げることに同じ様な仕草で礼をする姿があった。

夏子と雅子は誰かに挨拶をして回るでもなく沈黙を守り、跡継ぎだとかいつこちらに帰ってくるのだかという言葉には耳を貸さず、曖昧な微笑みでお茶を濁した。そのつましさが人々の同情を買っていた。二人が、注がれる度に酒を飲み干し、上機嫌とさえ見える小笠原本家の強い要望でこの席に着いた事は誰の目にも明らかで、この場においてはみすばらしいとさえ思える身なりからは、家を追い出された後の仕打ちが伺えた。

それでも夜がふけ、それぞれが各々の役目を終え、眠りの床につく。夏子と雅子は異を唱える事なく小笠原の実家に泊まった。もとも大きな屋敷で部屋は幾つもあり、その中で昔は夏子の部屋だった一室に母娘は体を横たえた。ほどなくし、夏子は母親の規則的な寝息を聞いていた。会いたくもない人間に囲まれ、娘を守るために平気を装う母親は、どれほどまでに疲れた事だろう。ため息と共に結局はこれまで自分を育ててくれた母に感謝した。ぐるりと部屋を見渡すと、彼女の持ち物だった机や本棚は一切片付けられているものの、所々ポスターを貼ったりした跡やお気に入りだったカーテンはそのまま残っていて、過ぎた時間を感じさせてくれ――眠れなかった。突然左頬の引つ掻き傷がひりりと疼きだし、奇妙な興奮と共に微かな頭痛がこめかみに押し寄せ、気がつくとき計は午前二時を指している。田舎の街では車の音も聞こえず、セミ以外の全

てが寝静まってしまった様な夜だった。

「コンビニ、有ったよね」

来る途中で目にした見慣れた青い看板を思い出し、夏子は財布をつかんだ。この日を限りに“過去と決別をするのだ”という強い意気込みが空回りしている事を自覚し、無性に喉が乾き、何か飲みたい気分だったのだ。

同じ時刻、離れの一室で夏子と同じようにまんじりともできずに過ごしている男がいた。清彦だ。彼は隣室で睡眠薬を飲みだらしく口を開けながら寝る母親の顔を思いながら、彼女がつかもうとした幸せとはなんだったんだろう、と、そう思い巡らせた。明美は隆敏が亡くなる前、いまだ旧姓を名乗る清彦に向かって何度も彼の養子になれるよう、全ての決定権を握る隆敏の父を説得するように説得したものだ。た。

『お前にだつて、ちゃんとした父親が必要なんだから』

それが財産目当てである事は、周知の事実だった。隆敏は確かに金持ちの息子では有ったが、資産の持ち主は結局彼の父親なのだ。つまり、夫を亡くなった瞬間、明美が全てを失う事は目に見えていた。こうなると、彼女自身の将来のためにも、どうしても清彦にこの家の人間になつてもらふ必要が有った。

「それは都合が良すぎるよ、母さん。この家の嫡子は夏子さんだ」
彼は頑にそれを拒んだ。血吸い蛭ひるの様にこの家に寄生して生きようとする考え方が嫌いだった。隆敏が気前よく金を出し、彼を東京の金がかかる事で有名な大学に進学させてくれた時も、彼は手放して喜ぶ事はできなかった。夏子親子の事を思い出す度胸が苦しく、彼女から奪ってしまった幸せを悔やんだ。こんな夜を彼は何度過ごした事だろう。清彦達が越してきた後、新しい家族のためにと離れが増築される事になったのだが、出来上がるまでの一ヶ月、彼はとりあえずとあてがわれた夏子の部屋で暮らしていた。彼女の十二年間の記憶の染み付いた天井を見上げながら、夜毎彼女の事を想った。記憶の中の夏子は一片の翳りも見せず、いつも生き生きと笑ってい

た。放課後のテニスコートの片隅で

「下級生はいつも球拾いばかりなんだよね」

と言いながら、友人とふざけながら拾った球の数を競い合っていた。体育館を掃除しながら壇上に立ち、校長先生のモノマネも披露してくれみんなを笑いの渦に誘った。彼女はまるで夏の日差しの下に咲くひまわりのようだった。そして夏子の太陽を曇らせてしまったのが自分なのだ、と夜毎目が覚める思いに駆られた。しかし彼にはどうする事もできない事だった。結局、子供は大人の事情に振り回されるものなのだ。もしかしたら反抗し、家を飛び出すという選択肢が有ったかもしれない。だがそんな事をしたからと言って現状は覆る事なく、むしろ悪くなるしかないという事を、彼は理解していた。清彦は水商売の母を持つ子供特有の道理の良さを身に付けていた。そして

『叶わなかった初戀^{はつこい}ほど、想い引きずるものはない』

そんな言葉を清彦は思い出す。中の一学期の終わり頃、彼女と二人で初めて担当していた図書室の整理の時に棚の後ろで発見したイタズラ書き。その時はお互い

「なんだよ、これ」

とか言いながら古めかしい“戀”の文字を笑ったものだった。そして丁度一年後、清彦はその言葉の意味を知る事になる。夏休みを直前にした教室で

「今度花火大会しよう！」

クラスメイトの誰かが提案し、次々にやろうと声があがる。しかし大体においてこういった盛り上がりは勝手な方向に話がそれ、どこか遠くへ流れて行くものだ。彼は友達と別れ水飲み場へと向かった彼女の後をさりげなく追ってゆき、ばくばくと唸る心臓を抱えながら何気ない顔つきで声をかけた。

「さっきの花火の事だけど、本当にやらない？ ナッツと俺の二人で」

彼の母親は、妊娠五ヶ月の身重。引き返す事のできない道を歩く。

少女が現実を知るまであと少し。いや。もしかしたら薄々気がついているかもしれない。彼はつながるはずがないと分かっているはずの赤い糸をたぐる。

「スタンド・バイ・ミーって映画、知ってる？ 友達どうして家を抜け出し冒険する話。俺さ、ああいうのに憧れていてさ」

疑う事を知らない夏子の顔にキラキラとした輝きが灯る。

「映画は知らないけど、いいね、そういうの。清彦、グッドアイデア」

「二人きりで」

「二人きりで」

いたずらっ子の面持ちでくすくすと笑い合った。

「他の奴らには内緒。真夜中にさ、家抜け出して神明社の裏に集合」清彦は彼女の家の近くにある神社の名前を挙げ、ぎりぎりでも有り得る空想を広げる。

「凄い、楽しみ。満点の星空の下でさ、大人に隠れて花火しちゃうのね」

叶わない夢だと知っている少年と、無邪気に信じる少女。

「約束だよ、絶対」

夏子は彼に向かって小指を差し出した。

「ああ、絶対。約束するから」

誰にも聞かれないよう、とっておきの秘密を打ち明ける様なひそひそ声、片頬のえくぼ。清彦は夏子の事を誰よりも綺麗だと思い、醜悪な大人の世界に足を突っ込んでしまっている自分を対極だと感じながら、何も知らない顔で果たせるはずのない約束に頷く。恨まれる事を覚悟し、むしろその事で夏子の記憶に残れるなら本望とばかり。

あの夏から十四年が経ち、その頃の倍の年齢を生きるほど時間が過ぎた事を知りながら、清彦は想いを越えられずにいた。過ぎ行く時間の中で幾つかの恋をしたはずで、それなりにときめいて、大事にしたいと思う女性と巡り会うチャンスも有ったのだが、と、彼は

振り返る。しかし、夏子への気持ちは特別なのだ。それは罪悪感もたらす影かもしれないと感じる事もある。初恋の甘さより、彼女に対する後ろめたさが忘れられない存在にしているだけだという事だ。

不謹慎なようだが、夏子がこの次にこの田舎へ帰ってくるのは、小笠原の最後の一人、祖父母の両方が死に絶え縁が切れる日だと清彦は感じていた。彼女にこの家や土地に対する執着はないのだ。というか、むしろこの家から相続するあらゆる全てをきっぱりと否定する事だろう。名前さえも、金さえも。振る舞いの席で酔った祖父が媚びる様に口にした

「二十八にもなって結婚してないってんだから、儂が小笠原に相応しい良い婿を迎えてやるぞ」
の言葉に、

「その話はいずれ改めて」
といかにも大人の模範解答を口にした夏子。しかしその口調はきっぱりと自分の意志を現していた。

『小笠原に頼る気は無い』

と。彼女は自立し、その上で恨みをも捨て去る事ができるのだ。そして彼の気持ちだけが永遠に取り残される。??? 起き上がった清彦は、何を考えるでもなく縁側に出て下駄を履いていた。林を抜けて行く夜風は心地よく、こうやって、時間と共に何もかもが風化し、あれ程強くいきおっていた気持ちや後悔や羞恥心までもがやせ細ってくれるかもしれない、そう彼に思わせてくれた。

続く

第三話 柳：火滴 消え細る赤く長い糸（後書き）

今回一カ所、余分なスペースが有る所が有ります。

『おめでとう』

心からそう思い、祝福をする自分。』

の部分なのですが、どうしても行を詰める事ができませんでした。
多分システムの都合だとは思うのですが、お許しくださいね。

第四話 散り菊：終（つい） 風に消えゆく花びら

地方のコンビニには、その地方らしい品物が置いてあるのが常というもので。レジの横には、お盆の季節に合わせた線香に、ロウソク。そして花火のお徳用パックに、懐中電灯、虫除けにライター。

夏子はそれらを横目で見ながら缶酎ハイの入った袋を受け取り、店を出て行こうとした。そのはずが、気の抜けた

「ありがとうございます」

の声を聞き立ち止まり、ふと線香花火に手を伸ばしてしまっていた。子供の頃、毎年彼女の七月八日の誕生日が夏の始まりとばかり、家族が揃って季節はじめの花火大会をしたものだった。そしてその夜のメは決まって線香花火。

「最後まで球を落とす事がなく咲き切らせられたら、願い事が叶うんだよ」

の言葉を聞きながら、風を避け身じろぎせずに行く先を見つめたものだ。今思い出せば、両親が離婚したあの年はそれがなく、ある種の前兆は有ったのだと今にして思う。

夏子は花火が湿らない様に両手別々に袋を持ち、満天の夜空を見上げながら心当たりの空き地を目指してずんずん歩いた。最後の願いを叶えるおまじないをするために。

秋祭りには賑わう神社も、暑い夏には草が生い茂り、人の気配を遠ざけていた。彼女は広場から少し外れた場所ですの光に背を向け小さくしゃがみ込み、そとと花火に火をつける。

「最後まで、咲きます様に」

買ってきた花火の束は二つ。合わせて二十本。最初の何本かは強すぎるライターの炎のためにあっけなく落ちてしまったが、その後はさすがに要領を得、花は確実に最後まで保ったかの様に見えた。そんな夏子の微笑みを、後からやってきた男の影が見つめていた。

線香花火の柔らかな光に照らし出された彼女の表情は、まるで子

供を抱いた母親のようだと清彦は思った。そのくせノーメイクの顔はまるで十代の少女の様に幼くも見え、女性らしい丸みを帯びた二の腕が蠱惑的こわくてきで、彼の中にまるで思春期の少年のようにヤバい感覚が湧き上がる。勿論そんな事をしてはいけない、分かっている。彼の中で爆発寸前の羞恥心が悲鳴をあげようとしていた。今の彼は、自分がいかに容姿に恵まれ、女性を惹き付けるか知っている。すぐ目の前にいる夏子に、全ての能力を使つて誘惑をしかける事もできる、そんな事を思いつく自分に腹が立ち、思わず拳を握りしめていた。

『畜生！』

本来は彼自身に発した怒りのはずだった。しかしその気配を感じ、夏子がはっとした表情で顔を上げ、厳しい顔つきの清彦の姿を見た。
「あつ……！」

手元の花火の溶岩の様に赤い球はぽとんと土に落ちた。

「ご免」

清彦はすかさず謝り、自分の顔に浮かんでいたはずの表情をうつむいて隠しながら、彼女に近づく。

「邪魔する気は無かったんだよ」と。

どうして彼がここに來たのか。そしてなぜ彼女がこの場所で花火をしていたのか。お互いに答えを察し、無言のまま目を反らした。

夏子は迷った挙げ句、花火を清彦に勧める。

「折角だから」

彼は躊躇ためらうう事なく

「うん」

と頷き、線香花火を受け取ると彼女の隣に腰を下ろした。残りは六本。清彦が先につけた花火はあっけなく落ちた。そして次に夏子が灯した一本は最後まで燃え、彼女はほっと胸を撫で下ろす。その次に清彦がやった花火は何とか無事に最後まで燃え

「お父さんから聞いた事が有る」

彼は終わった花火の先端を眺めながら思わず漏らしていた。清彦のいうお父さんとは、夏子の父の事だ。その言い方はまるで妻の父親に向かつて“義父さん”と呼ぶ、そんな響きが有り、夏子は妙に笑えた。

「線香花火を最後まで落とさずに終われたら、願いが叶うって」

「ええ、私もよくそう聞かされた」

彼は自分の望みを聞いて欲しくてこんな質問をしてくるのだろうか、それとも夏子の望みを知りたいのだろうか。清彦の考えを読み取れないまま、彼女は四本目に火をつける。ぷつくりと膨らむ赤い球から、徐々に光が爆ぜ、花弁は松葉の様に広がった。

「綺麗だね」

こうやっている時間が、人生の全ての時間だったら良いのに、そう二人は同時に思った。

「長い間、ご免」

彼女の手元で花火の命が全うされた様子を見届けた後、彼は心にもしかかっていた想いを吐露した。

「ナッツのお父さんと、俺の母親の事、実は知っていた。知っていて、でもナッツに教えないでいた」

弁解はない。ただ、事実だけ。夏子はここに来て初めて、ああ、やつぱりそうだったのかと思った。清彦の眉間には皺、そして口元には情けない様な歪みが生じていて――葬儀の時の彼の様子を思い出す。ただ恥じ入るばかりの清彦を。彼はずっと自分自身を責めていたのだ、と。清彦は終わった花火を見据えたまま、無言の夏子に畳み掛けた。

「他に、約束も破った」

それはこの神社ですと誓った花火の事だ。

『指切りげんまん、絶対だよ』

子供が命がけで誓う他愛のないまじない。

「そうだね」

彼女は否定せず、次の一本を彼に渡しながら、柔らかい声で答えた。

「ひどいヤツだね、あんたって」

裏切られた、そんなありきたりの感情はまるで湧かなかった。むしろここに来て真実を話してくれた彼にほっとしていた。

「うん」

清彦は頷く。そして

「ありがとう」

着火された花火の炎は不安定に揺れ、今にも落ちそうな風情を保ち、それでいてぎりぎり一杯の所で柳の葉の様な軌道を描き終盤を迎える。

「俺ね、ずっと君が好きだった」

今この瞬間に、彼は全てを言いきりたい、そう思った。

「ずっと、ずっとナツツの事、好きだった。というか、多分、今でも好きだ」

花火の火は何度も消えそうになりながら、最後の瞬間まで持ちこたえた。

清彦の告白は夏子の体に行き渡り、全身は火がついた様に熱くなる。中学生の頃、もしかして、と思う時はあったのだ。でも、こうして成人した大人の男性に面と向かって言われるのはこの上なく照れくさく、彼女を動揺させた。

「俺ばかり言いたい事言って、子供っぽいな」

清彦はあの少年の日の様に小さく肩をすくめ、上目遣いで彼女の足下を見た。

「あつ、うん」

返す言葉を探すものの見つからず、彼女は最後の線香花火に火をつけた。夏子は願うはずだった望みを頭の中に思い浮かべ、一度決めた事だから最後まで神様に任せなければいけないのだと自分に言い聞かせながら慎重に紙縊こよりの先を持つ。

その花火はぱちぱちと心地よい音を鳴らし、周りを照らした。風は凪なぎ、夏子の

『清彦の事を忘れられます様に』

の願いは叶うかの様に見えた。その散り際、二人の隙間を突風が吹き抜けた。

「あつ……」

フェードアウトしかけの種が、最後の最後で涙の雫しずくの様に大地に落ち、短い音をたてた。

こうして二人の夏は終わった。

清彦は帰り道に聞いた

「ありがとう」

の夏子の言葉を胸にしまい込み、

「もし父さんと母さんが離婚しないで、私がこの土地に残っていたら、私の人生そのものが干涸びていた、そんな気がする。県下のそこそこの短大に進学して、花嫁修業みたいな事して。でもって祖父が選んだ、ずっと独り身で堅実だけが取り柄のアラフォー男と見合いして、結婚して、子供産んで。家に尽くすだけの人生を終わるはずだったんだから」

の将来を、確かにそうかもしれないと思い、ある意味自分を励ました。そして夏子の手の中には、清彦の名刺。最初は焦って書いたらしく歪んでいるメールアドレスに、後半には几帳面な楷書の現住所。「このアドレスは友達しか知らなくて、すぐに連絡がつくから。連絡待ってる。というか、とりあえず、友達から」

しどろもどろになり、何だか何を言っているのが分からなくなっている清彦を、夏子はまるで少年の頃の彼を見ているようだと言った。「そうね、時間ができたら連絡するから」

でも

「いつか必ずするから」

彼女は約束をした。

「約束だよ」

「約束ね」

差し出された彼のすりとした小指に、夏子の小指をそっと絡ませながら、二人は遠い夏に嗅ぐはずだった火線香の香りを、あるはず

のない記憶の奥から引き出していた。

終わり

第四話 散り菊：終（つい） 風に消えゆく花びら（後書き）

ここまでおつき合い頂きありがとうございました

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7170n/>

花火線香 ～ひと夏の思い出～

2011年2月17日13時01分発行